

子規・漱石の友人
教育者・漢学者

近藤我観の生涯

元松山市素鷲小学校校長
伊予史談会会員

上岡 治郎

一、はじめに

「近藤我観とは、どんな人か」と問えば、ほとんどの人が「知らない」と答えるであろう。ちょうど「子規」の本名が「常規」「漱石」の本名が「金之助」であることを知らない人が多いのと同じである。

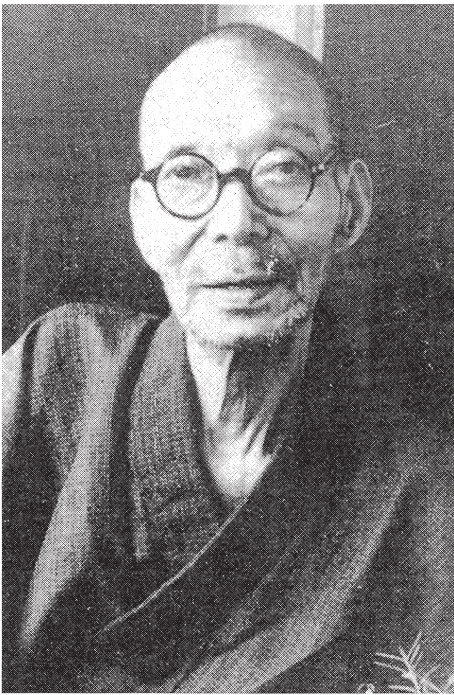
（そのために最初に、我観の三つの呼び名を紹介しておく。）

本名 近藤 元晋

（げんしんとも言う。）

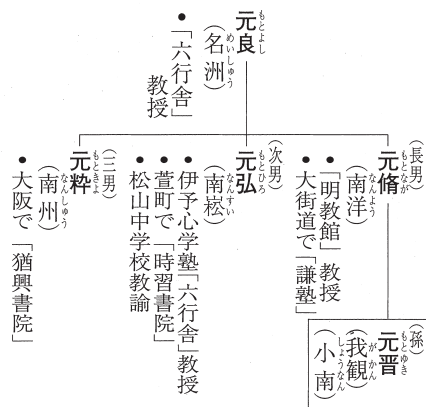
俳句の号 近藤 我観

漢詩文の号 近藤 小南



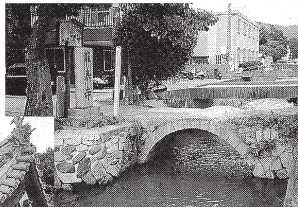
晩年の近藤我観

二、近藤家の家系図



三、近藤家の墓地

龍泰寺は、城北を流れる大川に沿って、護国神社と千秋寺のちよūdō中間にある禅宗の寺である。そして、大川にかかる石造りのめがね橋や、松山藩の漢学者近藤一族の眠る寺としても有名である。



大川にかかるめがね橋



龍泰寺山門



▼左は祖父・名洲の墓
右は次男・南松の墓



▲左は長男・南洋の墓
右は孫・小南の墓

※三男・南州の墓は大阪にある

〔近藤元晋・略年譜〕(年齢は数え年)

明治2・12・2 松山市小唐人町二丁目(現在の大街道)に父元脩の長男として誕生する。(1歳)

少年時代、正岡子規と交友あり。「謙塾」を開く父に漢学を学ぶ。

また14歳ころ大阪に行き、叔父の元晋に漢学の指導を受ける。

明治18 大阪師範学校に入学する。

明治20 愛媛師範学校に転じ、同23年卒業し、外側尋常小学校(現番町小学校)に奉職する。(22歳)

明治27 松山高等小学校の先生が中心の俳句結社松風会会員となる。

明治28 正岡子規が漱石の住む愚陀仏庵で新俳句の指導をしたため句会に熱心に通う。(27歳)

明治28・10 「愛媛教育雑誌」百号記念の祝句を子規に依頼する。その頃子規から「散策集」を借りる。

明治28・10・12 子規の送別会に参加。

明治29・4・10 熊本へ旅立つ漱石から別離の俳句を送られる。

明治30・6 死亡した叔父の後を継いで松山中学の漢文の教師となる。

明治33・7 東京小石川女子師範附属高女に勤める。(32歳)

明治34 父元脩の死により帰国し、松山高等女学校に勤務する。

明治39・3・31 今治中学校に勤務。

明治43・5 私立の北予中学校に勤務する。(42歳)

大正2 「癸丑吟社(きちゅうぎんしゃ)」をおこし、生涯同志と漢詩を作り漢詩集などを発行する。(45歳)

昭和8・3 病気で北予中学を退職。

昭和8・6 柳原極堂が病氣見舞いに来たので子規直筆の「散策集」を見せる。(65歳)

昭和35・4・14 死去。(享年92歳)

四、我観の少年時代

子規が少年時代、祖父の大原観山から漢学の指導を受けたように、我観もまた父親の南洋から、漢学の指導を受けているのである。共通した少年時代と言える。

ところで、少年時代の子規と、我観の交友については、名著と言われる柳原極堂の「友人子規」から、その一部をくだいて紹介する。

「明治十二年ごろ私共はよく中の川にある正岡の家へ遊びに行つたが、ある時子規は『僕が新聞をこしらえるけん、君（我観のこと）はその材料を得るため探訪をおやり』と言ひ出し、私たちが聞いたこと、見たことを報告すると、彼は編集長顔をし、『これは物にならぬから没、これは面白いから採用しよう。』などと云つてそれを文章に書き、筆写の廻覧雑誌を作つて私たちに見せたりしていた。

私が報告した材料で採用になつたものの一つに、大街道と二番町と出合つたあたりにあつた船田という医者の子規の、門前につないでいた馬が何に驚いたか急にあばれ出して通行人に怪我をさせたという事件を、彼は余程気に入つたらしく、『これは面白い。早速書こう。』と言つていた……。

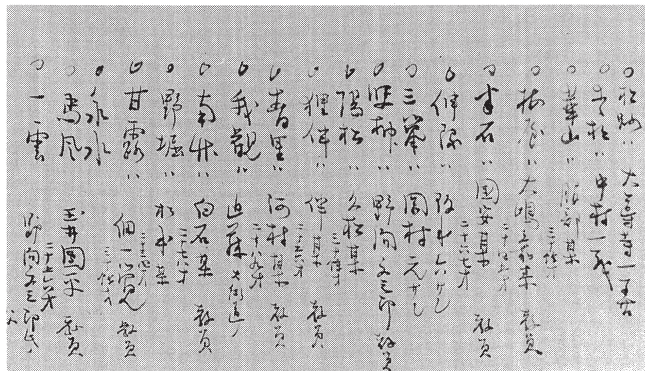
五、俳人「我観」

①松風会会員となる

初めは松山高小の教員が自主的にしていた俳句サークルに、丁度帰省中であつた画家で子規派俳人の下村為山が加わつたために正式の俳句会結成となる。

発会式は明治二十七年三月、名称は松風会、会員は①愛松、②狸伴、③伸緑、④半石、⑤叟柳、⑥青里、⑦馬風、⑧南竹と高等小学校教員八名に外部の為山を加えた九名であつた。

ところで五月には、海南新聞社の柳原極堂と森孤鶴（盲天外）が参加し、更に明治二十七年九



下村為山が松風会会員の氏名を子規に知らせた手紙(明治27年9月29日)

月二十九日に為山が子規に送つた手紙の中に、松風に新加入者の氏名も確認でき、特に近藤我観の名前も見える。しかも自分では俳号を「観我生」として、子規に「俳号は我観がよい。」と言われて以後、素直にその名で通しているのである。

なお、松風会会員全員の俳号についても面白い話がある。それは子規が、漱石の「愚陀仏庵」を出て東京に行く前日の松風会会員による送別会の席上で、十八人の出席者全員の俳号を詠み込んだ俳句を発表したことである。

- 松路 大導 道寺一善
- 愛松 中村一義
- 華山 八服部某 三十餘歳
- 梅屋 大鳴 嘉泰 二十餘歳
- 半石 八國安某 二十四五歳 教員
- 伸緑 八阪本 二十六七歳
- 三風 八岡村元サン
- 叟柳 八野間文三郎 教員
- 陽松 八久松某 三十餘歳
- 狸伴 八伴某 二十五六歳 教員
- 青里 八河村某 二十八九歳 教員
- 我観 八近藤大街道ノ
- 南竹 八白石某 二十七八歳 教員
- 野堀 八松本某 二十三四歳 教員
- 甘露 八佃一覺 三十餘歳 教員
- 永水
- 馬風 玉井團平 教員
- 一雲 野間文三郎氏ノ父

子規という人間の座興というか、サービスピ精神というか、ほのぼのと楽しめるのである。ここでは、我観を詠んだ句だけを紹介しておく。

（我観）

観念の月晴れにけり、我一人

②文教会館にある子規の句碑

「愛媛教育雑誌百号の祝ひに松に菊古きはものゝなつかしき

子規

昭和四十八年二月七日建立、除幕式は十月十一日。碑の文字は、「寒山落木」の子規自筆の拡大。明治二十年六月十二日に発足した愛媛教育協会の「愛媛教育雑誌」は、同年七月十五日創刊。明治二十八年の天長節の十一月三日に第百号を発行することとなり、当時、外側尋常小学校（現番町小）教員であつた近藤我観が、その祝句を頼むため、愚陀仏庵に子規を訪ねた。我観は漢詩文をよくする家柄に生まれ「小南」と号したが、「我観」とも号して俳句を好み、松風会会員で、子規に親しかつたのである。

庭に立つて来意を告げると、子規は無造作にこの句を書いて渡された。

もう一句、「百号に満ちけり菊はさきにけり」の句も書いてあつた由。

この教育協会は、今日の愛媛県教育研究協議会に受け継がれ、この碑のある愛媛文教会館内に、その事務局がある。子規

の「散策集」は、我観が預かり伝えた。

〔俳句の里・松山〕より引用

六、教育者「近藤元晋」

近藤元晋先生を我観と呼ぶのは、初期松風会で俳句に熟した明治二十七年と二十八年のわずか二年間である。

そのためこの章では近藤元晋として、教職の人生を追うことにする。

最初の年譜をもとに校種別に区分けをすると、次のようになる。

小学校教員 ー 七年
中学校教員 ー 三十一年
女学校教員 ー 五年

計 ー 四十二年

その中で特に松山中学校時代と、北予中学校時代のことを書く。

①松山中学校時代

彼がなぜ松山中学校の教師になったかという、松山中学の教師をしていた叔父の近藤元弘（南崧）が病気で急に亡くなったためである。この叔父は漢学・詩・書道にすぐれた人物であった。

そして、その叔父の後を継いで松中の漢学の教師になったのだから大変である。第一に中学

校教師になる資格を取らねばならない。

明治三十年六月赴任のあと漢学の勉強をし、文部省漢文科検定試験に合格して助教諭となったのは明治三十二年七月である。これを見ても俳句どころではないということや、明治三十三年に東京の学校に行ったこともうなずけるのである。

ここで当時の教育制度の説明をすると、小学校の先生は訓導、中学校の先生は教諭・助教諭、そして尋常小学校は四年制の義務教育、高等小学校は四年制であるが普通の子は二年で止めていた。

②北予中学校時代

父南洋の死によって郷里に帰り松山県女、今治中学と転動していた元晋が退職して私立の北予中学校に勤めた事情は知らない。

ただ北予中学校の創設期から充実にかけて白川福儀・加藤彰廉・秋山好古・烏谷章と四代の校長に仕えた幸せは理解できるのである。

次に、北予中学校時代の先生の活躍振りを、卒業生の文章その他で拾うことにする。

（大正十年卒業生）…そのほか、多くの恩師の思い出は尽きない。近藤先生の音吐朗々と読んでくださった『赤壁賦』や『岳陽樓記』にウツトリ聞き惚れて、時間の経つのも忘れたこと。

（大正十一年卒業生）…自分は北予中学二年生の時、父を亡くし、半年たらずで母を失った孤独の身。独立歩の自分を、学校では加藤校長先生はじめ寛教行先生、近藤元晋先生、仙波保太郎先生など諸先生から慰められ激励された。そのうれしさが通学の帰り道で涙となったこともあり、夜、机に向かった勉強の時にさえ泣けてきたこともあった。自分は北中五年間、中川の井上要先生宅近くのお寺で自炊生活をして通学したものである。

また、昭和六年卒業生の文章には、「生徒監」という名称や「生徒課長の元晋先生」ということばも見えて来るのである。そして特に印象深かったのは亡くなられた秋山好古校長のご葬儀が昭和五年十一月十日に行われた日の情景である。

東京で実施するご葬儀の時刻に合わせて松山でも実施し、北予中学校理事総代の井上要氏に続いて近藤元晋先生が、北予校長代理として、秋山校長に対する哀悼文を読み上げたのである。そして、その文章によって、秋山、近藤お二人の人間関係の深さを知るのである。

七、退職後の先生

①教え子の病氣見舞い

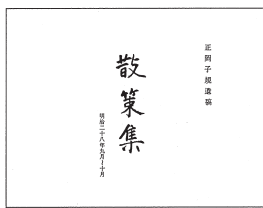
• 病氣のため退職したが、教え子の病氣の見舞いや、励ましの手紙、送って来た薬のおかげで元気になる。



教え子の病氣見舞い
経済企画庁長官の菅野和太郎
(大正2年卒)
愛媛新聞 (昭和34.8.3)

②子規直筆の「散策集」を世に送る

• 見舞いに来た柳原極堂との、子規の思い出話から「散策集」を見せ、極堂が「鶏頭」に発表する。



松山市が発行した「散策集」の表紙

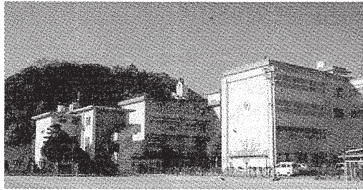
③文化的な仕事をする

• 子規・漱石の思い出話
• 「挿桃遺跡碑」の撰文

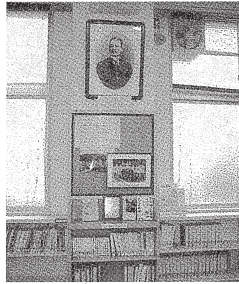


挿桃遺跡碑 (南吉田町)

孫 筆 所 撰 漢 雄 翰 与 文章 不朽 功 千
古 江山 有 光 耀 一 天 明 月 一 坡 前
題 志 望 園 小 南 子



現在の松山北高校舎



図書館 秋山好古関連コーナー



校史資料室



井上要胸像・白川福儀 徳碑



平成16年度郷土研究部作成地図
「秋山好古校長の通った道」

晩年は
郷里で
教育者として

秋山好古

北陸中学校校長を務めた

大正14年 創設間もない陸上競技部生徒と。
前列左から3人目が秋山好古

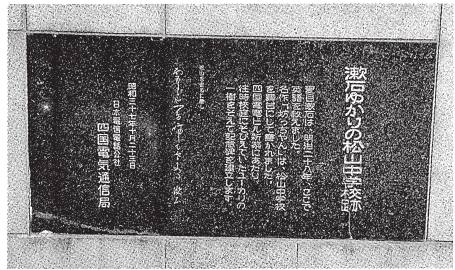
八、松山北高を訪ねて

近藤元晋研究の最終コースとして、文京町の北高を訪問し校史資料室や図書館の「秋山好古関連コーナー」を見せて頂き、司馬遼太郎の「坂の上の雲」と「大阪師範学校」を思い出す。

そして、秋山校長が最後には教育者として終わったように、近藤元晋先生も教育者としての人生をまっとうされたのである。

①子規の句碑
文教会館は祝谷町一丁目、県の愛媛保養所の隣にあり、愛媛教育の伝統を継ぐ建物である。

③お孫さんの家を訪ねて
お孫さんは近藤元規氏で土橋町で薬局を経営。その家系図は、
近藤元晋（祖父）— 元家（長男）— 元規（孫）



②漱石の句碑
この碑は松山市一番町四丁目のNIT四国総支社前にある。ここは夏目漱石の名作「坊っちゃん」の舞台となった松山中学校の在った場所であり、並んで愛媛師範学校も建っていた。



そこには、この句碑と共に、師道讃仰の碑がある。

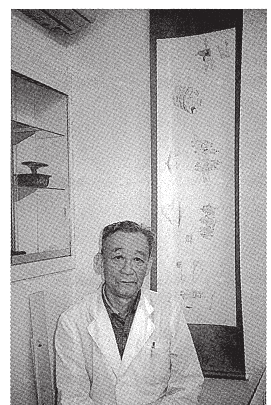
九、おわりに

近藤元晋先生の生涯を、私なりにたどってみて、強く感じるのは、漢学者一家の絆の強さである。そして次に感じることは、教育者としての熱意と誠実さであり、その花を咲かせたのが私立北予中学校での二十余年ではなからうか。

ところで、私がここで「俳人我観」を考えた場合、初期の松風会会員として熱心に句会に参加したのは約二年である。

そして、その間に子規との友情を深め、漱石とは、お互いに尊敬し合う友情を温めたように思うのである。しかも、その根本には俳句があった。子規には「散策集」と、文教会館にある俳句。漱石には我観に贈った次の俳句二句がある。

わかるるや一鳥啼て雲に入る
永き日や欠伸うつして別れ行く
(愚陀仏)



お家で大切に保存している物で特に参考になったのは、左から順に子規・先生・漱石を描いた絵巻物で、作者不明。先生とは我観のことらしい（家宝の絵巻物と近藤元規氏）。